

## 第 11 回 心理学とワイルド研究

明治時代は西洋の学問を日本に移入することが大きな役割を果たした時代とすれば、大正時代は、さらにそれを制度化し、教育においても研究においても組織化されるようになったことが大きな特徴だろう。ここでは、日本における心理学の受容状況の概略と「心理学とワイルド」について触れておきたい。

### (1) 日本の心理学受容

佐藤達哉 (b.1962)によれば、日本における心理学の受容ルートは 6 つに分類される。

- 1 西周のオランダ留学 → 精神哲学の紹介。「奚般氏著心理学」を翻訳出版
- 2 宣教師の日本普及 → 同志社英学校における「新知識」としての心理学
- 3 外山正一のアメリカ留学 → 東京大学(及び前身校)における「新知識」としての心理学
- 4 伊沢修二のドイツ留学 → 教師養成のための心理学
- 5 井上哲次郎のドイツ留学 → 哲学としての心理学
- 6 元良勇次郎のアメリカ留学 → 実証的な心理学<sup>(1)</sup>

日本に西洋の心理学が紹介されるようになったのは明治初期のことである。早くは明治 6 年(1873)に開成学校(東京大学の前身)のカリキュラムに「心理学」という言葉が見られる。そして、明治 8 年(1875)にはヘブソン/西周訳『心理学』が文部省から刊行された。この当時心理学専門雑誌はなく、明治 7 年(1874)に創刊された『明六雑誌』や明治 13 年(1880)に創刊された『六合雑誌』、明治 14 年(1881)の『東洋学芸雑誌』は心理学的研究の紹介・発表の

場として大きな役割を担った。また、明治 33 年(1900)創刊の『丁酉倫理講演集』は一般の人々に学問を認識させる役割を果たした。*De Profundis* への言及が見られた明治 42 年(1909)7月の『丁酉倫理講演集』(第 82 集)には西田幾多郎「神と世界」も収録されている。明治 45 年(1912)には東京帝国大学の心理学科出身者が中心となって、心理学の専門雑誌『心理学研究』が発刊された。

こうした背景の中で新島襄(1843-1890)が設立した同志社英学校で「性理学」や「心理学」の名称の講義が行われた。<sup>(2)</sup>

さらに

東京帝大では 1908(明治 41)年、福来友吉が東京帝大助教授になった。大学での心理学担当者が 3 倍(といっても三人)に増えたわけである。福来の専門は睡眠・臨床、当時の言葉では変態心理学であった。つまり、日本の心理学は極めて初期に、元良の心理学、松本の(広義の)教育心理学、福来の変態心理学、という三本立ての時期を迎えたのである。<sup>(3)</sup>

といったように心理学が学問研究領域の中に入って来たのだ。

## (2) 『変態心理』

大正時代に入ると、大正 5 年(1916)に日本精神医学会が設立、翌年に『変態心理』が創刊された。設立者の中村古峽と『変態心理』については、平成 13 年(2001)1月の小田晋・栗原彬・佐藤達哉・曾根博美・中村民男編『「変態心理」と中村古峽』(不二出版)がよい参考となる。「変態」とは文字通り「常態」「正態」ではないこと、従って「変態心理」とは異常心理、超心理というほどの意味である。精神的、心理的な変態心理など幅広く取り上げており、「同性愛」もそのひとつとして取り上げられ、ワイルドという人物だけでなく文学作品の変態心理学的研究は幅広く行われていたのである。

白刀生は『変態心理』にワイルドに関するものを少なくとも 2 つの論文を

寄せている。ひとつは大正 11 年（1922）5 月の白刀生「悪魔主義者ボオドレル」（『変態心理』第 53 号）では以下のようなワイルドへの言及がある。

日本のデアボリスト岩野泡鳴氏は、『悪魔主義が十九世紀の後半に於て佛蘭西に出現したのは、膚浅な常識、通俗な感情、並に平凡な俗美の技巧に対する勝利の凱歌であつた。ボドレルのこの主義は、思想として舊世界の生活を一新した。所謂「近代性」発展の道を開拓し、文藝としては、また、ヱルレン等の表象主義、マネやゴンクルの印象主義、ニイチェの超人主義、イブセンの表象的自然主義、オスカワイルド等の唯美主義の源泉となつた。歐洲の思情界並に文藝界に於ける天才にして、一人としてこれが洗禮を受けないものはないと云つてもいい程だ』と例の一流の誇示的の言方で云つてゐる。<sup>(4)</sup>

続いて大正 11 年(1925) 5 月の白刀生「ワイルドの人格と唯美主義」（『変態心理』第 55 号）は以下のような冒頭で始まる。

オスカア・ワイルドは、其唯美主義を實行するために、且つは又それをプロパガンダするために、如何にも唯美主義者らしい、病的異状な變妙な姿をして、市中を意気陽々として練り歩いた。<sup>(5)</sup>

また、ワイルドに対する世間の評価を次のように紹介している。

兎に角常識的に出来上つてゐる世間の人たちは、彼の事を、不道德漢とけなし、享樂主義者と賤しめ、墮落せる肉慾の奴隸乃至狂人と罵倒したのである。<sup>(6)</sup>

さらに、

ワイルドの個性に従へば、人生の最大最高の目標は、非現実的な遊離的な唯美であつて決してその他のものであり得べくもない。従つて、倫理とか道義かと云ふものは、個性の発展上、極く劣等な地位しか持たないものである。<sup>(7)</sup>

と、紹介している。また、ワイルドの作品についてはワイルドの人格、芸術観を最もよく表現しているものとしては『ドリアン・グレイの肖像』と『サロメ』を取り上げている。<sup>(8)</sup>

ワイルドは同性愛者としても知られているが、日本ではこのことがそれほど大きく問題視されてはいない。むしろ「変態心理」という意味から言えば、極度に芸術への趣向を示した者として取り扱われている傾向にある。白刃生が取り上げている部分もまた唯美主義者としてのワイルドである。

大正8年(1919)9月の榊保三郎『性欲研究と精神分析学』(実業之日本社)、大正9年(1920)6月の沢田順三郎『神秘なる同性愛』(天下堂)など、ワイルドの「同性愛」を扱ったものもあれば、作品中からサディズムの傾向を読み取るものや作品を心理学的に研究したものなどもあった。大正8年(1920)は森田正馬が神経症患者を対象とした精神療法とした、いわゆる「森田療法」が開発された時期であることも念頭に入れると、人間の心を解き明かすアプローチが学問的にも医学的にも定着していたことがわかる。

当時の心理学界の状況を知るには、平成9年(1997)11月の佐藤達哉・溝口元編『通史 日本の心理学』(北大路書房)、平成14年(2002)9月の佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』(北大路書房)、平成15年(2003)10月のサトウタツヤ・高砂美樹『流れを読む心理学史』(有斐閣)がよい参考となる。

## 参考資料

- 『変態心理』（解説・総目次・索引）不二出版、1991年11月
- 佐藤達哉・溝口元編『通史 日本の心理学』北大路書房、1997年11月
- 心理科学研究会歴史研究部会編『日本心理学史の研究』法政出版、1998年7月
- 『変態心理』（第13巻～第23巻）不二出版、1998年11月
- 『変態心理』（第24巻～第34巻 解説・総目次・索引）不二出版、1999年11月
- 『変態心理』（第24巻～第34巻）不二出版、1999年11月
- 『変態心理』（第1巻～第12巻）不二出版、2001年1月
- 佐々木隆「大正時代のワイルド受容」（『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月）
- 佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』北大路書房、2002年9月
- サトウタツヤ・高砂美樹『流れを読む心理学史』有斐閣、2003年10月

## 注

- (1) 佐藤達哉「近代日本における心理学の受容と制度化」（『立命館人間科学研究』第5号、立命館人間科学研究所、2003年3月）、p.248.
- (2) Ibid., pp.248-249.
- (3) Ibid., p.251.
- (4) 白刀生「悪魔主義者ポオドレル」（『変態心理』第53号、日本精神医学会、1922年5月）、pp.364-365
- (5) 白刀生「ワイルドの人格と唯美主義」（『変態心理』第55号、日本精神医学会、1925年5月）、p.603.
- (6) Ditto.
- (7) Ibid., p.606.
- (8) Ibid., p.608